

## “Algae” という名のイルカ

北米 Florida 州の Marineland にある Marine Studios の水族館には、数尾のイルカ (porpoise) が飼つてあるが、プールの上空に餌を吊してやると、水中から高く飛び上つて餌を取るようにならしてあるので人気を呼んでいる。中でも花形選手は 16 呎の高さまで跳躍するイルカであつて、このイルカは “Algae” という名が付けられているという。UP-Sun Photo 提供のニュースで、ジャパン・タイムズ 8 月 12 日の紙面にその写真が載つている。

Algae という複数名詞を、イルカの名前に付けるという感覚はわれわれにはちよつと理解しにくいところであるが、強いて想像すればこのイルカの皮膚にまだら模様があつて、海藻の茂つた有様を思わせるのもあろうか。それはともかく、一びきのイルカの固有名詞に使われた例として記録に値する。(北海道大学水産学部 時田 郁)

### クロキヅタ *Caulerpa scalpelliformis* (R. BROWN) AG. var. *denticulata* (DECSN.) WEBER VAN BOS. の一産地

昭和 29 年 5 月 4 日愛媛県西宇和郡伊方村 (現在伊方町) ノ内仁田之浜の海岸の岩礁上にクロキヅタが多数群生しているのを発見した。低潮線及び低潮線下 30~70 cm の間の岩礁上に着生し、体高は 10~20 cm で浅海産のものである。最近自然的環境変異の関係か年々生育減退し、もしこのままの状態で推移するとすれば将来或は絶滅するかもしれないので報知し記録にとどめておく。(伊方町 野村義弘)

## 涸沼臨湖実験所の誕生

茨城大学文理学部生物学教室では、かねてから涸沼に面する民家の離れを借用し、非公式に茨城大学涸沼研究室の看板を掲げ、若干の研究設備を整えて、湖沼学的生物学的な研究を続けてきた。しかし借家住いでは何かと不便であり、小さくとも独立の研究室を建て、大学の正式な研究機関として活潑な研究をすることが要望されていたところ、幸にも地元の茨城県東茨城郡石崎村から、風光明媚な親沢鼻に 210 坪の用地が無償で提供され、茨城文化振興会からは実験室新営基金として 30 万円が寄託された。このような地元の協力により、昨年 12 月上旬に木造 12 坪半の実験室が落成し、茨城大学直属の研究機関として、涸沼臨湖実験所 (Hinuma Hydrobiological Station) が誕生した。初代所長には生物学教室主任の佐藤正己教授が任ぜられ、文理学部から 5 名、教育学部から 2 名の教官が所員を命ぜられたので、その氏名と研究テーマを次に掲げる。

佐藤正己 (海藻並びに水草, 植物性プランクトンの分類), 野本宣夫 (植物性プランクトン, 水草の生態), 今村泰二 (魚類の食性, 湖岸動物相, 動物性プランクトン), 篠崎寿太郎 (水棲動物の滲透圧の調節, 一般湖沼学的研究), 野村正雄 (湖沼の成因, 湖底堆積物, 周囲の第四紀地盤運動), 山崎芳夫 (軟体動物, 底棲動物相), 高橋栄 (水産地理学)。

現在の設備は, 和船2隻, 3馬力半艇外機1台, 採泥器, 採水器, 顛倒温度計, 透明板, ドレヅジ, プランクトンネット, その他の普通のものがあるだけで, 学長を委員長とする湖沼臨湖実験所建設委員会が整備拡充にあたり, 所員会議が運営方針を協議する仕組みになっている。

まだ誕生したばかりであるが, 既に東京都立大の加崎英男助教授が車軸藻類の調査に來所された。実験所としては差支のないかぎり広く各方面の学者の研究に協力したいと考えているので, 御希望の方は水戸市渡里町, 茨城大学湖沼臨湖実験所長宛に連絡していただきたい。(茨城大学文理学部生物学教室 佐藤正己)

## 新 著 紹 介

ヘルムケ及びクリーゲル共著

### 電子顕微鏡像における珪藻類の被殻

J. G. HELMCKE und W. KRIEGER: Diatomeenschalen  
im elektronenmikroskopischen Bild. (1954, Berlin)

本書は書物というよりも写真集であつて, 13×18 cmの大きさの印画紙へプリントした200葉をIおよびII Teilに分け, おのおのをブック型の堅ろうなボール箱に収納してある。なお各 Teilの箱内には各葉の写真に極めて簡単な摘要を記した目録と索引をかねたパンフレットとビューワーが付属している。

この珪藻類電顕写真集の特別な点は, その写真の殆んど全部が2枚1組になつたステレオ(立体)写真であつて, 付属しているビューワー(観察用メガネ)を用いてこの写真を見ると美しく浮き上つて, 珪藻殻の立体的構造が手にとるように見えるようになっているのである。

新著紹介としての要旨は上に述べたところに尽きるけれども, ここに紹介者としてはステレオ顕微鏡写真について少しく説明して置きたいと思う。

われわれが日常肉眼で物体を見る場合はそのほとんど全部が両眼を使用しているのであつて, なにか特別の理由があつて両眼で見たのでは不便な場合のほかは片眼で見ることはないの言うまでもないことである。両眼を同時に用いて見なければ被視物体の遠近・前後の関係を十分に見取ることができず, 片眼では状況判断によつて前後関係を理屈や経